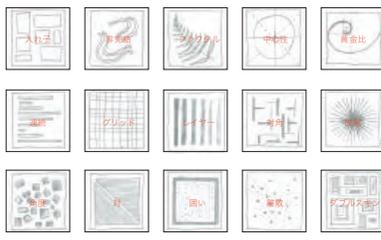


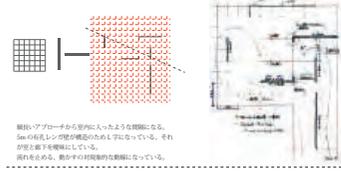


領域をつなぐ平面構成 100

年代、文化、技術、環境等に関係なく量と量、機能と機能、外部と内部など領域の繋がりに特徴のある建築平面を100個トレース、構成要素を収集し、本研究の分析対象とする。

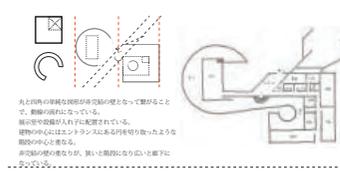


○ sonsbeek-Pavilion / Thomas Rietveld / 1955



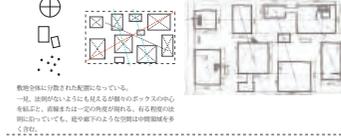
縦横のグリッドから空間に入ったような状態になる。Seeの非対称な空間が構成の中心となる。それが空間をつなぐ機能としている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。

○ 真生堂アートハウス / 谷口吉生 / 1978



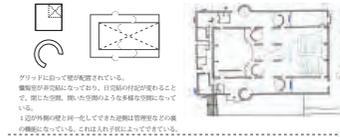
丸と四角の異なる形状が非対称的に配列することで、空間の連続性がある。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。

○ 森山邸 / 西沢立衛 / 2005



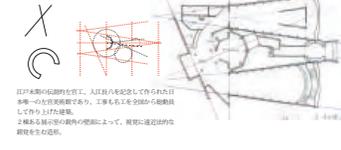
機能別に分割された空間になっている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。

○ roman catholic church / Aldo van Eyck / 1969



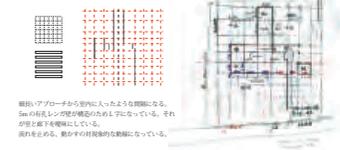
グリッドによって空間が分割されている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。

○ 長八美術館 / 石山修武 / 1984

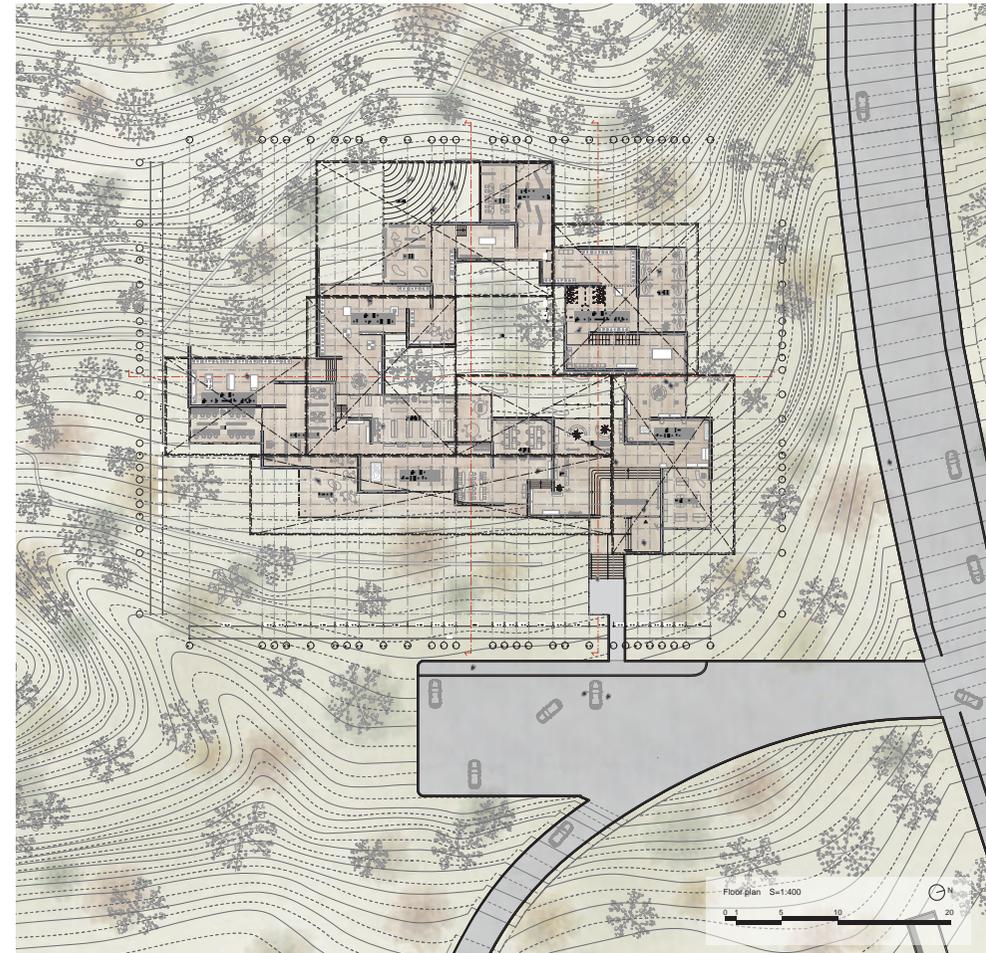


この美術館の設計も、人自身を念じて作られた。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。

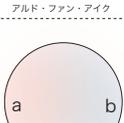
○ ソーレンセン自邸 / Erik Christian Sorensen / 1955



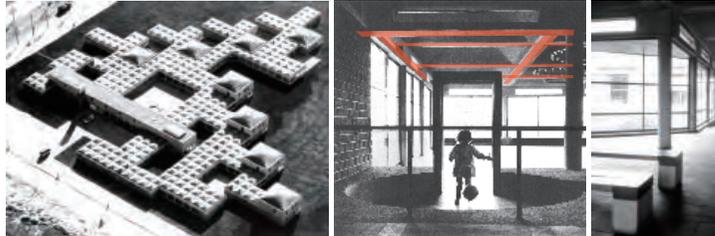
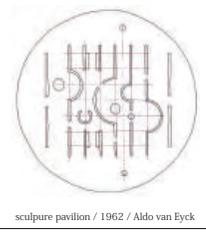
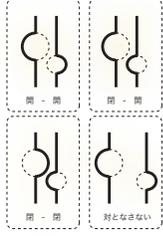
縦横のグリッドから空間に入ったような状態になる。Seeの非対称な空間が構成の中心となる。それが空間をつなぐ機能としている。見られる空間、見られる空間の連続性も変わっている。



オランダ構造主義 -Aldo Van Eyck-



1つの領域に対称的な2つの空間概念を同時に表現するための手法として認識される中間領域



○ 図と地 3,360mmのグリッドでつくられた室単位が、開閉を開けながら反復している。室単位は、ちぎれた単位から大きな全体へとつながっている。

○ 認識する視線 室単位だけでなくガラス面や開口もまた反復することで、ある地点からは全体を認識できる視線が通る。自分が現在居る場所が、室単位の中の一つに属しているのかを認識できる。

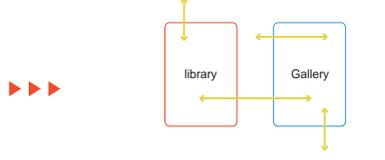
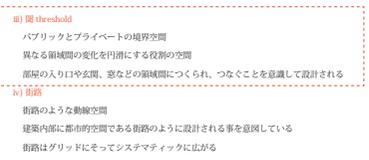
○オランダ構造主義の設計

オランダ構造主義は、多様性を持たせながら、場の連続性を考えつなぐことを意識して設計されている。これを、分節や階という手法からあることができた。つまり、相反する様々な両極を和合 (reconcile) し、対現象 (twin phenomenon) として同時存在させる「対称的な」の重要性を理解する事ができる。

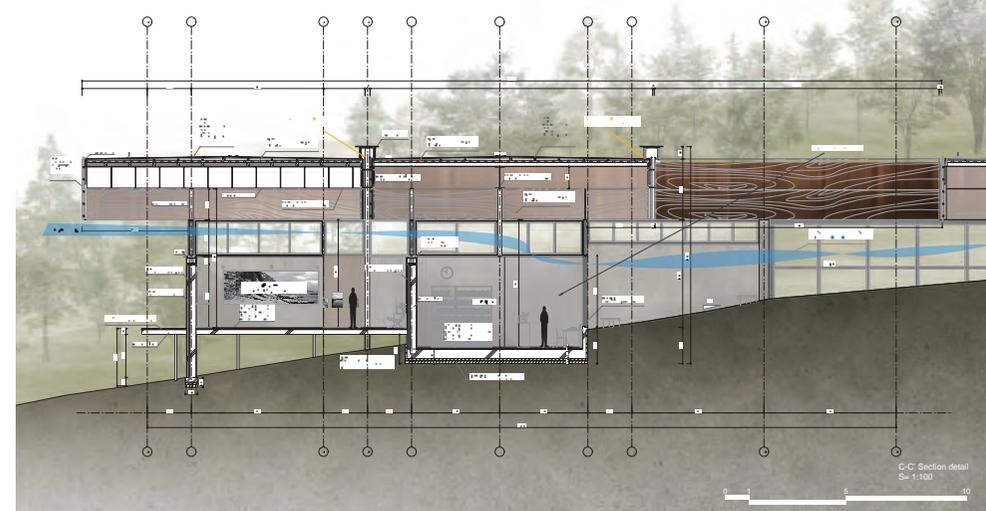
○オランダ構造主義の設計手法

i) スケールによる分節 ヒューマンスケールな場をつくるために段階的なスケールで空間が分節される

ii) プログラムの融合 複数のプログラムが柱のグリッドなどによってまとめられている 融合され、全体の統一へ

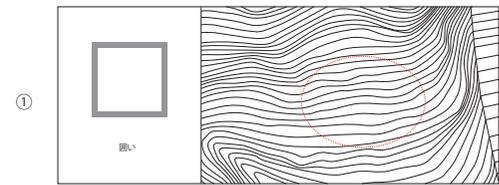


閾という異なる領域間を繋ぐ手法から、対現象として両義的な空間構成をつくりだすことで、複数のプログラムに統一性を持たせられるだろうか。

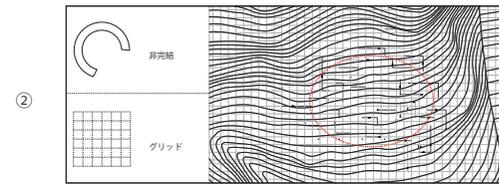


# STEP.3 構成ダイアグラム

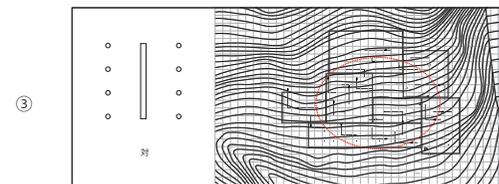
## ○ 配置計画



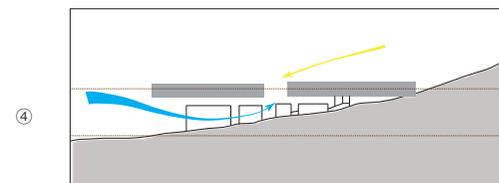
① 敷地を規模に合わせたプログラムの動線で囲う  
敷地境界線が無い敷地に対して、建物の領域を形成するために囲いの操作をする。それが動線となり、プログラムを築く基礎計画となる。



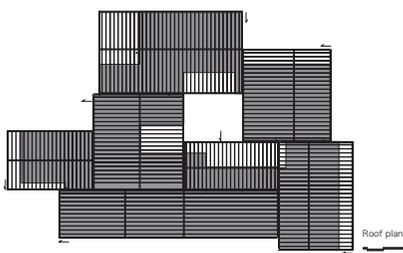
② 敷地と資料館に適したL字を軸上に配置  
敷地全体を2mのグリッドを引き、動線計画にふまわしと考えるL字を配置する。L字は感覚的に配置するのではなく、敷地形状・グリッドに合わせて徐々にズラしていく。



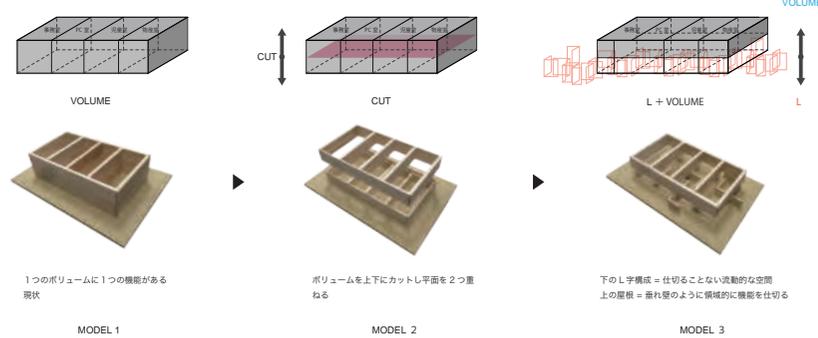
③ 斜面を緩やかにつなぐようにL字がズレて配置される。屋根での領域を重ね合わせる。  
L字の上に図書館の機能となる層を重ねる。流動的なL字の平面と傾斜的な四角の屋根を重ねることで「動・静」の両義性を持った構成となる。



④ 積熱、太陽光、潮風を考慮した上で立面を決定  
壁と開口が交互にならび、夏には風を受け止め室内の奥まで流れるようになる。採光はスリット上の開口と、屋根と屋根の間からはトランプライトの光が室内に落ちる。



## ○ イメージダイアグラム



1つのボリュームに1つの機能がある現状

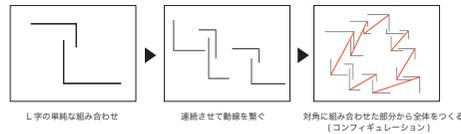
ボリュームを上下にカットし平面を2つ重ねる

下のL字構成 = 住切ることない流動的な空間  
上の層根 = 垂れ壁のように領域的に機能を仕切る

## ○ プログラムダイアグラム

### 資料館

ギャラリー空間は流動的な空間構成であり、室単位で区別せず流れるような動線の中に室のような展示スペースを間隔的に配置する。  
平面構成により得られたモジュールより、非標準的な形状であるL字の単純な層構成によって、室・室・通路、内部、外部を構成していく。この際、L字は2mグリッドに合い、対角の形態を連続させ、部分から全体の動線空間へと繋げる。



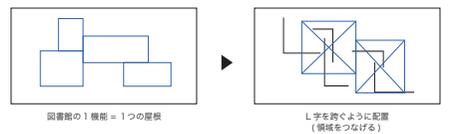
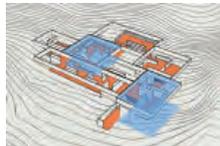
L字の単純な組み合わせ

連続させて動線を繋ぐ

対角に組み合わせた部分から全体をつくる (コンフィギュレーション)

### 図書館

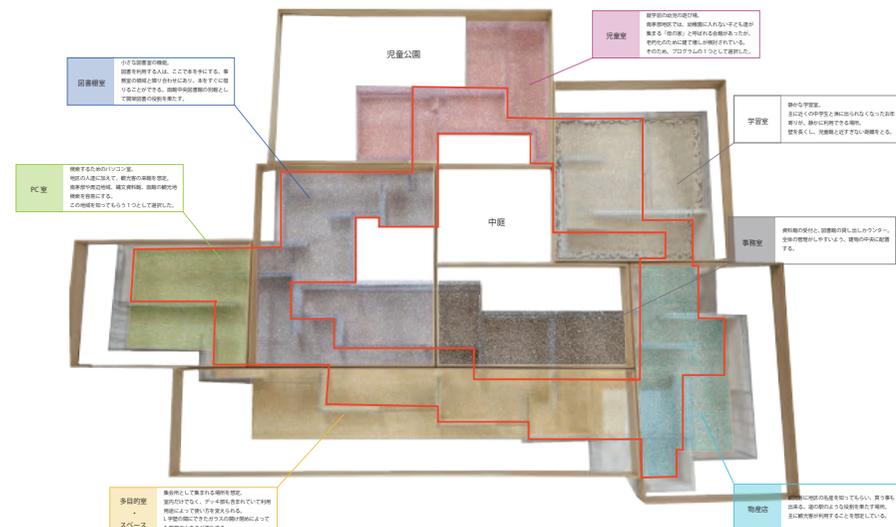
図書館空間は静止的な空間構成であるため、室のような領域的な空間構成を基本とする。壁に囲まれた閉鎖的な領域ではなく柔らかくまとまりで構成された室を計画する。L字という物理的には強い境界の上に敷かれたような柔らかい空間認識的な仕切りで構成する。L字の流動的な空間構成と重なる事で、図書館空間では典型的な造形を持つ空間となる。



図書館の1機能 = 1つの層根

L字を跨ぐように配置 (領域をつなげる)

## ○ プログラムの関係



図書館空間は静止的な空間構成であるため、室のような領域的な空間構成を基本とする。壁に囲まれた閉鎖的な領域ではなく柔らかくまとまりで構成された室を計画する。L字という物理的には強い境界の上に敷かれたような柔らかい空間認識的な仕切りで構成する。L字の流動的な空間構成と重なる事で、図書館空間では典型的な造形を持つ空間となる。

資料館空間は流動的な空間構成であり、室単位で区別せず流れるような動線の中に室のような展示スペースを間隔的に配置する。平面構成により得られたモジュールより、非標準的な形状であるL字の単純な層構成によって、室・室・通路、内部、外部を構成していく。この際、L字は2mグリッドに合い、対角の形態を連続させ、部分から全体の動線空間へと繋げる。

児童公園

児童室

学習室

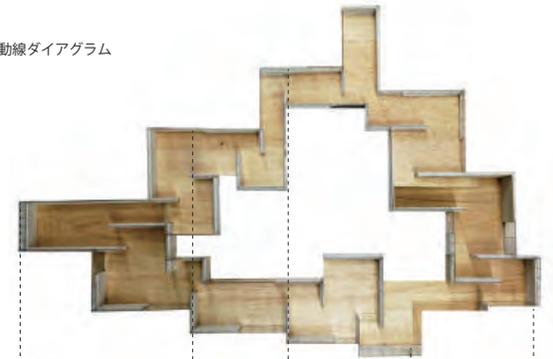
事務室

多目的室

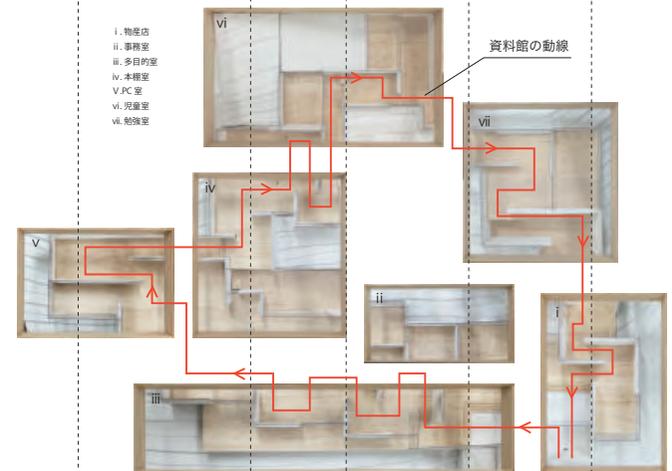
PC室

物産店

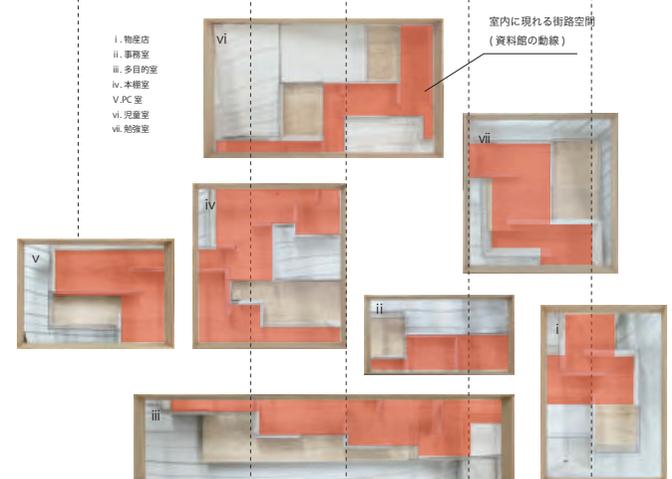
## ○ 動線ダイアグラム



資料館の平面



図書館の平面



重なる2つの平面

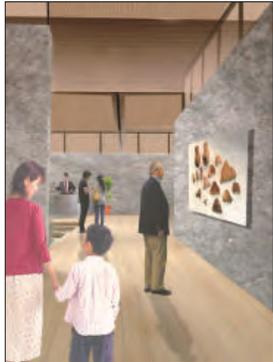
STEP.4 断面図、立面図、パースペクティブ



perspective 1



エントランスホールから見展室へと中庭を通して視線が通る



perspective 2



多目的からエントランスへと空間が連続し、空単位が認識できる



perspective 3



多目的からエントランスへとズレながら連続する空単位が認識できる



perspective 4



異文展示と地域PC室をわけた屋根

